

「動物飼育におけるバイオセキュリティ研修会」の開催

平成19年12月12日（水）、動物衛生研究所講堂及び動物飼育施設において、「動物飼育におけるバイオセキュリティ研修会」が開催された。本年度から始まった農研機構「業務活性化に資する取り組み」の一つとして行われた。北海道農業研究センター、東北農業研究センター、近畿中国四国農業研究センター、九州沖縄農業研究センター、畜産草地研究所、食品総合研究所及び動物衛生研究所から主に業務科職員など54名が参加した。

谷口稔明動物衛生研究所長のあいさつ、志村亀夫動物疾病対策センター長の動物衛生研究所におけるバイオセイフティの紹介の後、総論として津田知幸海外病研究管理監による「動物飼育におけるバイオセキュリティの概念」についての講義が行われた。病原体、毒素などによる人や動物への危害を防止するための“バイオセイフティ”と病原体、毒素などによる国家、地域、施設への侵入、拡散を防ぐための“バイオセキュリティ”の違い、クリーンベンチと安全キャビネットの空気の流れの違いを示しながらSPF動物舎などの病原体を入れない“侵入防止”と高度研究施設などの病原体を外へ出さない“封じ込め”の概念など、非常に分かりやすい具体的な説明があった。

次に、各論として実験動物管理科の磯部が「動物飼育において気を付けるべき病気」と題して講義を行った。日常の動物飼育管理業務において、牛、豚、鶏、実験動物など畜種別に症状からの異常発見の手がかり、日頃の観察の重要性など家畜伝染病予防法、動物福祉及び動物実験法の観点から説明した。

実習として実験動物管理科職員の指導によるSPF動物施設への立ち入り方、飼育方法、退出方法を実際に白衣、長靴の履き替え、手袋、マスクの装着などの体験、高度研究施設での動物飼育管理方法の管理区域外研修を行った。実際の動物管理方法とあって、飼育管理中にプリオン感染牛に接触した場合の対処方法、プリオン感染試験後の飼育室の除染方法など多数の質問が寄せられ、熱のこもった

質疑応答が繰り広げられた。

参加者からは、日常の動物飼育管理業務の中で、病気を出さないためにいかに外からの侵入を防ぐか、人や物品の持ち込みの注意、日頃からの健康観察が病気の早期発見に繋がり、万が一病気を発見したときの対処方法がよく理解できたなど種々の発言やコメントをいただいた。

今回、初めての取り組みであったが、同じ機構内で動物実験や動物飼育に関わる職員の衛生概念と知識の向上、職場間の情報交換・交流を通して、今後、実際の現場での対策方法の相談、伝達講習の実施などの足がかりに役立てて頂ければ所期の目的は達したと思われる。また、より正確な実験データを得るために、いかに健康な動物を飼育、維持する必要があるか、そして動物試験を通して得られた成果が、生産現場での生産の安定性、生産物の安全性、消費者への信頼と繋がるなど、この研修会で改めて業務科（動物管理科）の仕事の重要性が認識され、知識・技術の向上だけでなく職員の意気高揚の機会になったとしたら幸甚である。

わずか一日の研修会ではあったが、朝から夕方まで目一杯の中身の濃い充実した研修会であった。計画から実施まで終始協力いただいた企画チーム及び実験動物管理科職員各位に深謝を申し上げる。

（動物疾病対策センター実験動物管理科）

